様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ４ 月 ２３ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０８６６

研究課題名（和文）イングランド国教会の海外進出－アメリカ植民地の奴隷への布教を中心に－

研究課題名（英文）Overseas Expansion of the Church of England: The Anglican Mission to the Slaves in British America

研究代表者
青柳　かおり（Aoyagi, Kaori）

大分大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０６３４６９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　18世紀におけるイングランド国教会の歴史については、イギリス・日本において研究がうすく、とりわけ国教会と海外との交流については未開拓の分野である。1701年、国教会はイギリス領アメリカ植民地における国教徒の司牧および異教徒への布教を開始するため、海外福音伝道協会(SPG)を設立した。本研究では、18世紀におけるSPGによるアフリカ系奴隷への布教活動について解明し、国教会の海外進出と発展を明らかにした。SPG宣教師は学校や教会で奴隷にキリスト教を教えて成果をあげていたのである。本国の国教会聖職者も布教を支援し、18世紀に国教会が活発に活動していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　In 1701 the Church of England established the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, the SPG for the care of the Anglicans and the missionary work to the heathens in British colonies. In this study, it is considered that the Church of England expanded overseas by instructing the heathens especially the African slaves in the British American plantations. The SPG missionaries worked energetically for the instruction of Christianity and conversion of the slaves. Anglican priests in Britain also supported the missionary work. It seems that the Church of England was active overseas in the eighteenth century.

研究分野：西洋史

キーワード：イギリス　アメリカ植民地　奴隷　布教　海外福音伝道協会　キリスト教　学校教育

１．研究開始当初の背景

代表者は一貫して、イングランド国教会に注目して近代イギリス宗教史・政治史について研究してきた。日本およびイギリスにおける近代西洋史研究においては、宗教改革研究や急進的プロテスタントであるピューリタン系諸宗派についての研究が多く、穏健派プロテスタントのイングランド国教会は国家宗教でありながら、あまり研究されてこなかった。特に日本では 16 世紀の宗教改革、17 世紀のピューリタン革命についての研究は多いものの、17 世紀後半以降の教会史は軽視されてきた。申請者は、すでに 17 世紀後半から 18 世前半における教会と国家の問題を検討するため、イングランド国教会に注目して、「包括」と「寛容」という宗教政策を明らかにした。これらの成果を博士論文にまとめ、平成 20 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の助成を受け、『イングランド国教会－包括と寛容の時代－』（彩流社、2008 年）として刊行した。拙著は西洋史研究の空白を埋めるものである。ただし、18 世紀の国教会についての研究は依然として非常に少なく、国教会は一般的に停滞し不活発であったとみなされてきた。

近年、イギリスではグレゴリやギブソンらによって 18 世紀の国教会像を修正する研究もみられるが、それらの研究においても国内の教会活動が中心で、国外の布教は扱っていない。一方、アメリカ植民地の宗教史研究にはノルの研究などがあるが、海外福音伝道協会 (SPG, the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts) は異教徒に関心がなく、白人のために牧師の業務をしていたとみなされている。そこで代表者は平成 16～18 年度、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を受け、イギリス国内の国教会の活動だけでなく、イギリス領アメリカ植民地との対外関係に注目し、18 世紀における国教会の発展を明らかにしようと試みた。その一例として、不活発とみなされている SPG 宣教師が、ニューヨークのアメリカ先住民へ布教していたことに注目した。

最新の SPG についての研究がアメリカで刊行されたが（T. Glasson, *Mastering Christianity: Missionary Anglicanism and Slavery in the Atlantic World*, 2011）、グラッソンは個別の宣教師による黒人奴隷への布教活動を検討しているものの、SPG 全体の奴隷への布教活動や方針、奴隷制についての思想、国教会の海外進出については見過ごしている。以上のように、18 世紀のイギリス教会史および国教会（SPG）とアメリカ植民地の交流史は、研究が十分に行われていない分野である。イングランド国教会は、現在においてもイギリスの公認宗教であり、君主が最高統治者であるため王室との結びつきが強い。さらに、国教会は現代の政治、社会、教育などの面において大きな役割を果たしている。また、アメリカや日本をはじめ世界中に聖公会が存在する。このように、国教会は歴史的にも現代社会においても大きな影響力を持つ重要な教会である。それにもかかわらず、日本・イギリスにおいては急進的ピューリタン諸宗派についての研究が盛んであり、国教会研究はあまり進んでいない状態である。このような研究状況において、国教会への評価は見直されるべきであろう。

２．研究の目的

18 世紀は奴隷貿易が盛んに行われ、奴隷制が当然視されていた時代であった。多くのヨーロッパ人の間で、奴隷は人間ではなく財産とみなされていた。彼らには魂がなく、愚かで野蛮なのでキリスト教教育は不可能と考えられていた。また奴隷の主人たちは、奴隷が洗礼を受けると自由になることを恐れて布教に反対していたのである。そのような中で、とりわけ SPG が重視したのは黒人奴隷への布教であった。1702 年以降、毎年刊行された SPG 年次記念大会の説教の付録によれば、宣教師は活発に活動して、ロンドンの本部に報告書を送っていたことが明らかになっている。イングランド国教会は現在においてもイギリスの公認宗教であり、現代社会においても大きな影響力を持つ重要な教会である。それにもかかわらず、これまで、日本・外国においてイングランド国教会やその対外関係および SPG についての研究は非常に少なかった。代表者が行ってきた SPG のアメリカ先住民への布教研究の成果の踏まえ、本研究は、イングランド国教会による奴隷への布教活動を解明し、18 世紀における国教会の海外進出と発展を明らかにすることによって、従来の国教会の位置づけを見直す革新的な研究を行うことを目的とする。

３．研究の方法

18 世紀における SPG の活発な海外布教活動および海外進出について、多くの一次史料に基づいて検討し、イングランド国教会の位置づけを見直すために、以下の研究方法に従って研究を行った。

平成 25 年度は、18 世紀におけるイングランド国教会の奴隷制についての思想を明らかにすることを目指した。奴隷制が存在する社会のもとで、国教会が奴隷制やキリスト教徒に改宗した奴隷の自由をどのように考えていたのかを明らかにした。SPG の黒人奴隷への布教についての一次史料や二次文献の収集・読解を進めた。SPG、プランター、奴隷制反対論者、それぞれの立場から奴隷制についての思想を分析した。

平成 26 年度は、主に 18 世紀前半の SPG 宣教師の布教活動を取り上げ、彼らの著作や報告書を分析して布教の意義を明らかにした。SPG やアメリカ在住の国教会聖職者の奴隷への布教活動を詳細に分析した。

平成 27 年度も史料収集を継続し、18 世紀後半における奴隷貿易廃止運動と SPG の布

教方針との関係についても調査を行った。奴隷貿易廃止運動が起きる 18 世紀後半までも視野に入れて、SPG 宣教師の布教活動をより詳細に検討した。

平成 28 年は、18 世紀全体の SPG の布教活動およびその意義について研究した。その研究構想を実現するため、大英図書館等で SPG および奴隷貿易廃止運動に関する史料収集を行った。また、学術雑誌に論文を発表するなど研究成果を公表した。

平成 29 年度は、奴隷への布教には学校教育が重要な役割を果たしていたという新たな知見を得て、学校での布教に関する資料収集、解読をすすめ、論文の執筆を開始した。最終年度にあたり、18 世紀全般における SPG の布教の意義を明らかにし、国教会が活発に活動して海外進出に成功していたことを示した。このように、本研究では最新のイギリス史、アメリカ植民地史の状況を踏まえて、SPG の布教活動に関する一次史料を収集、解読し、従来の研究では軽視されていた 18 世紀の国教会の評価を見直した。

なお、本研究においては、SPG 文書に加え、奴隷貿易に関する膨大な関連文献が存在するので、毎年、国内外で文献収集を行った。聖書における奴隷制についてのテキストを分析するほか、国教会をはじめ、複数の他宗派の聖職者による同時代文献も幅広く収集して読解・分析した。18 世紀前半、後半に分けて 18 世紀全体における SPG 宣教師の布教活動を取り上げ、彼らの著作や報告書を中心に大英図書館やニューヨーク公共図書館等で史料調査を行った。それらの文献を分析するほか、国教会聖職者の未刊行の手稿史料も収集して使用し、SPG による布教の意義を明らかにした。

４．研究成果

18 世紀におけるイングランド国教会の歴史については、イギリス・日本において研究がうすく、とりわけ海外との交流については未開拓の分野である。1701 年、国教会はイギリス領アメリカ植民地における国教徒の司牧および異教徒への布教を開始するため、海外福音伝道協会(SPG)を設立した。本研究では、18 世紀における SPG によるアフリカ系奴隷への布教活動について解明し、国教会の海外進出と発展を明らかにした。SPG 宣教師は学校や教会で奴隷にキリスト教を教えて成果をあげていた。本国の国教会聖職者も布教を支援し、18 世紀に国教会が活発に活動していたことを明らかにした。

近代イギリス宗教史研究は、ピューリタン系教会の思想史研究が中心であり、イングランド国教会は不活発とされ評価は低い。また、国教会の対外関係史研究は重要であるにもかかわらず、始まったばかりである。本研究は、イギリス領アメリカ植民地における布教活動をイングランド国教会の最初の布教組織である SPG を中心に検討し、国教会の位置づけを見直すものである。18 世紀の国教会の海外進出についての研究は、国内・外でほとんど研究されていない状況の中で貴重である。

代表者は、後述の主な発表論文等に挙げた研究成果を発表した。まず、イングランド国教会の奴隷制観を明らかにした。当時、イギリス人の間では、キリスト教徒に改宗した奴隷は奴隷ではありえず、自由になれるという概念があった。一方で、奴隷の主人や奴隷制を擁護する人々はキリスト教徒奴隷の自由には反対し、聖書を根拠に、たとえキリスト教徒になったとしても奴隷身分は変わらないと主張した。代表者は様々な国教会聖職者の著作を検討し、国教会側が奴隷の主人らと同様の立場を示して、奴隷制を擁護していたことを明らかにした。また、国教会側は奴隷への布教に反対する主人たちに対しては、キリスト教徒奴隷は自由になれず奴隷のままであること、キリスト教徒になれば従順な良い奴隷になることを主張し、布教を推進しようとしていたことも明らかにした。

SPG 宣教師は、奴隷の主人たちを説得するほかにも、アメリカ植民地で様々な困難に直面した。例えば、布教活動における資金不足である。SPG の活動はすべて敬虔な信者や聖職者による寄付金からまかなっており、資金も人材も不足する中で彼らの待遇は低かった。しかしながら、彼らは積極的に奴隷に関わっていた。代表者は SPG 宣教師の活動の記録を、特に彼らから SPG 本部への報告書や聖職者への書簡等の史料を解読して解明したのである。

SPG 宣教師は現地に学校を建設して奴隷に教育を行い、キリスト教を教えて信者を増やすなど、活発に活動していた。とりわけ、貿易の中心地ニューヨークではアフリカ系奴隷の人口が多く、18 世紀初期から熱心な宣教師や教理問答師、教師によって布教が盛んであった。18 世紀初期のころはまだ学校がなく、教師らが様々なプランテーションを巡回して教えるという形がとられていた。次第に、白人の子供のみならず奴隷のための学校が建設されて改宗者も増え、成果をあげていった。そのほか、南部のサウスカロライナや西インド諸島も布教が盛んな地域であった。

さらに 18 世紀後半まで視野を広げ、奴隷貿易廃止についての議論が SPG 関係の国教会聖職者の間で起きていたことを、彼らの説教から検討した。国教会や SPG の基本的な立場は奴隷制の擁護であった。しかし、一部の主教や聖職者は奴隷貿易や奴隷制の問題点を述べ、奴隷制が廃止されていくことを希望していたのである。奴隷貿易およびイギリス領内奴隷制は 19 世紀初期に廃止されるが、18 世紀半ばにおいて、すでにこのような見解が述べられていたことは画期的であろう。

以上のような研究をまとめ、SPG による奴隷への布教の意義を明らかにした。従来、18 世紀におけるイングランド国教会は不活発

であるとみなされがちであった。しかしながら、本研究では国教会が海外進出を果たして発展していたことを明らかにした。

本研究は、今後の近代ヨーロッパ史、アメリカ史、宗教史、比較・交流史の解明に貢献するものである。さらに現在、世界各地で宗教的対立が頻発しており、異文化理解、宗教の多様性への理解が緊急の課題となっている。SPG は、布教は不可能と考えられていたアフリカ系奴隷への教育・キリスト教化を行った。SPG の活動内容の成果を明らかにする本研究は、異なる宗教間、民族間の対話といった重要な議論に格好の素材を提供する、今日的な意義も含まれる独創的な歴史研究であり学術的価値が認められよう。

SPG は現地のフランス・カトリック教会に対抗して、アフリカ系奴隷への英語やキリスト教教育に熱心であり、現地の宣教師からは教育について数多く報告されている。本研究は、単にイギリス史・宗教史のみならず、アメリカ史、フランス史、比較・交流史、教育史、マイノリティ研究、グローバル・ヒストリー研究など幅広い分野に貢献するところが多い。本研究は関連分野への学術的波及効果が予想され、多くの研究者との議論を活発化させると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

１、青柳かおり「イングランド国教会とアン女王基金」『史苑』78 号 1 号、2018 年、33-52 頁、査読有

２、青柳かおり「イギリス領アメリカ植民地における奴隷の改宗」『エクフラシス－ヨーロッパ文化研究－』第 6 号、2016 年、112-128 頁、査読有

３、青柳かおり「イギリス領アメリカ植民地における奴隷制とイングランド国教会　－海外福音伝道協会年次記念大会の説教を中心に－」『大分大学教育福祉科学部紀要』第 37 号 1 巻、2015、89-103 頁、査読無

４、青柳かおり「18 世紀前半におけるイングランド国教会と奴隷制－キリスト教徒奴隷の自由－」『イギリス哲学研究』第 37 号、2014 年、15-29 頁、査読有

〔学会発表〕（計 7　件）

１、青柳かおり「王室財政とイングランド教会－アン女王治世における聖職者支援－」大分大学教育学部短期プロジェクト研究発表会、2017 年

２、青柳かおり「18 世紀における奴隷の教育と海外福音伝道協会」日本西洋史学会第 66 回大会、2016 年

３、青柳かおり「18 世紀イギリス領アメリカ植民地における黒人学校」大分大学教育福祉科学部短期プロジェクト研究発表会、2016 年

４、青柳かおり「奴隷貿易廃止運動の形成とイングランド国教会」大分大学教育福祉科学部短期プロジェクト研究発表会、2015 年

５、青柳かおり「イギリス領アメリカ植民地における海外福音伝道協会　－奴隷の改宗を中心に－」科研・基盤 A 研究会「中近世キリスト教世界の多元性とグローバル・ヒストリーへの視角」2015 年

６、青柳かおり「18 世紀イングランド国教会と奴隷制　－海外福音伝道協会年次記念大会の説教を中心に－」日本西洋史学会第 64 回大会、2014 年

７、青柳かおり「イギリス領アメリカ植民地の奴隷への布教について　－海外福音伝道協会を中心に－」大分大学教育福祉科学部研究者交流会、2013 年

〔図書〕（計　1　件）

１、青柳かおり「イングランド国教会と非国教徒－「包括」と「寛容」の近世史－」甚野尚志、踊共二編『近世ヨーロッパの宗教と政治　－キリスト教世界の統一性と多元性－』ミネルヴァ書房、2014 年、300-317 頁。（全 413 頁，i-xi.）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
１、青柳かおり「王室財政とイングランド

教会－アン女王治世における聖職者支援－」『教育研究所報』第 46 号、2017 年、63 頁

２、青柳かおり「18 世紀イギリス領アメリカ植民地における黒人学校」『教育研究所報』第 45 号、2016 年、45 頁

３、青柳かおり「奴隷貿易廃止運動の形成とイングランド国教会」『教育研究所報』第 44 号、2015 年、35 頁

４、青柳かおり「18 世紀前半イギリス領アメリカ植民地における奴隷とキリスト教」『教育研究所報』第 43 号、2014 年、30 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

青柳　かおり　(AOYAGI, Kaori　　)

大分大学・教育学部・准教授

研究者番号：30634696

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)